自分を表現する道具は話しことばだけではありません。
書きことばもあります。
身振り手振りの動作で表現することもあります。
顔の表情や視線で表現することもあります。
絵や歌で表現することもあります。
いろんな表現手段をつかい、自分を表現しています。

単純な練習ばかりしていると、飽きられてしまう。
だからと言って難しすぎると、嫌がられてしまう。
教材をさがすのは、大変です。
大変だといいながら、楽しんでもいるんですが・・・。
今日、ことば遊びのページを見ていて、おもしろいのがありました。
発音練習にも使えそうです。
おもしろいので紹介します。

★２才からあそぼ！めいろの森
http://www.din.or.jp/~fuwa/meiro/main.htm

「遠くの大きな氷のうえを狼十ずつ大勢通った」
「いきなり何のこと」と思われる方もおられるかもしれません。
読み仮名をふってみてください。
「とうくのおうきなこうりのうえをおうかみとうずつおうぜいとうった」
では誤りです。
お列長音の例外で
「とおくのおおきなこおりのうえをおおかみとおずつおおぜいとおった」
で正解です。

双六に「ふりだし」「あがり」ということばがあります。
「はじめ」と「おわり」
「スタート」と「ゴール」と同じような意味です。
学習のはじめに、オセロの白と黒のこまを一方の色にそろえて並べさせます。
「双六が出来上がり」
と言って、ふりだしにあるオセロのこまをひとつ裏返します。

一つ終わるごとに裏返していきます。
「あがり」までくれば、勉強が終わりです。

12 月、師走の月です。
師が走る月。
師が走るくらい忙しい月。
いつも落ち着いていた師が、仕事をするのに走り出すくらい忙しい月。
いままで暇そうにしていた師が、やり残した仕事を片付けるために、走り出すくらい忙しい月。
1 年のしめくくりです。
とにかく、家でも行事の多い月です。
休みの日に子どもといっしょに家の掃除をするのもいいと思います。

野球のダイエーの監督　王は、現役時代にホームランの本数で世界記録を樹立しました。
そのときのインタビューで
「通過点です。」
と答えていました。
子どもはいつも新しいことを経験しています。
新しいことを獲得し、発達していきます。
新しいことを学んで、学習していきます。
子どもはいつも「通過点」にいます。
「ことばだより」の 100 号も「通過点」です。

大学で野球をしていた友だちが言っていました。
キャッチボールの基本は球を相手の胸に向かって投げることだと聞きました。
受け手の身長、技術、能力に応じて、投げ手はスピードを調整しなければならない。
ことばも同じです。
繰り返し少しずつ変化させながら、子どもの問いに応答する。
そうすることで、子どもはことばを覚え、表現していくんだと思います。
同じことを今さっき答えたでしょう。
まだ覚えていないの？
では子どものことばは育ちません。
同じことを問われても、違った方向から答えるようにすればどうでしょうか。

子どものころ、お祭りに行くと、いつも買って帰りました。
りんご飴です。
りんごが特においしいわけではありません。
飴がそれほどおいしいわけでもありません。
それでも、買って帰りました。
飴をなめてはりんごをかじっていました。
りんご飴を買いに、お祭りに行っていたようにも思います。
りんご飴を買うことを楽しみにしていました。
こだわりだったのかもしれません。
こだわりに近い楽しみがあったからこそ、一人でもお祭りに行けたんだと思います。

「説明したからわかるでしょ」
とついつい思ってしまいます。
わからないんだから、もう一度同じ説明をすることです。
それで、わからなければ、ちがう方法で説明することです。
それでも、わからなければ、同じような問題を同じように解かせることです。
理解できなくても、どんな方法で解けばいいのかわかるでしょう。
子どもには変化させながら、繰り返し対応することが大事です。

雷が鳴っています。
「ゴロゴロ」という音が耳から入り、光が目から入ってきます。
最後に音がおなかに響いてきます。
雷の怖さが、耳から、目からそしておなかから伝わってきます。
子どものころは、雷さんに持っていかれては大変と、おへそをおさえていました。
ありえないと思いながらも、おへそをおさえていました。
もしかしたら、雷の音がおなかに響いてくるのをやわらげていたのかもしれません。
おへそをおさえることで、怖さを少しでも感じないようにしていたのかもしれません。
子どもが、怖さを感じることも大切ですね。

「ひかる」と言うことばを読みます。
ひかるものは何かな？と聞きます。

ライト、とうだい、いけ（ことばの教室の窓から、池が見えます。太陽の光を反射させています。）、ほし、ほたる、かみなりと答えるでしょうか。
それを文で表現します。
〇〇がひかる。
そのあと
まぶしいのはどれかな？
きれいだなと思うのはどれかな？と問います。
次に
かみなりがひかると、□□さんはどう思う？
ほたるがひかると、△△くんはどう思う？
と問います。
答えたのを文にします。

「はんぶん」と言うことばを読みます。
はんぶんはどれ？と聞き、
「りんごのはんぶん」「ケーキのはんぶん」「ジュースのはんぶん」を選びます。
正しく選べたら、同じ立方体の積木を八つ積んで子どもに渡します。
「半分だけください」と言います。
次に「半分だけ弟に上げてください」と言います。

三階の窓から、幼稚園に子どもさんを送る親御さんを見ていて気づきました。
冬の寒いときはそんなでもなかったんですが。
暖かくなるにつれ、親御さん同士が話し込んでいるということです。
暖かくなるにつれ、三階まで声が聞こえてきそうです。
「話に花が咲く」
つぎからつぎへといろいろな話が出てくることを言います。
暖かくなると、話もしやすいのでしょうね。
寒くなると口が堅くなり、
暖かくなると口が軽くなるようです。
気温と話す量は関係がありそうです。
気温が高くなりすぎるとどうでしょう。

子どもが「あつい」と言ったとします。

返事が「そう、あつい」では子どもの求めている答えになっていない場合があります。
時間は、3時ごろ。
場所は、家の玄関口。
季節は夏です。
外から帰ってきた子どもが言ったとします。
「麦茶が冷えているよ」と返事をすると思います。
季節が冬だったら、
「え、熱でもあるの」と子どものおでこに手を当てると思います。
同じことばでも場面により、伝えようとすることがちがいます。
伝えようとしていることを理解し、対応することが必要です。

日々の生活の中で必要な刺激をうけとめて、発達していきます。
階段を一段ずつのぼることに似ています。
ときには不安に思い、立ち止まり休むことがあっていいと思います。
必要な刺激を受けとめることができにくい子には、まわりの大人が刺激を
与えつづけて、発達を支援していきます。
エスカレーターをのぼっていくことに似ています。
これも、立ち止まり休むことがあっていい。
ただ適切な刺激でないと、エスカレーターから転げ落ちてしまう。
子どもの発達、障害の特性に配慮して、適切な刺激を与えないといけない。

近鉄が大軌と言われていたころ、この地域には松の木が多かったらしいです。
秋になるとまつたけ狩りで、臨時停車していたと言います。
今は松の木が枯れてしまいました。
松の木にかわり、桜の木がふえ、入学式前後には桜の花がきれいです。
冬の冷たい風が吹くときも、枝につけた芽をふくらませています。
子どもの発達は身近な大人には見えにくいものです。
しかし、適切な刺激を受け、少しずつ確実に芽をふくらませています。
枯れてしまった松の木にならないように注意して、
適切な刺激であることを忘れないように・・・。

１時間の指導の中で子どもに
「がんばれ」

と何回声をかけるだろう。
大人は、ついついこの程度のことなら、できて当たり前だと思い課題を出してしまう。
そんなときに「がんばれ」ということばになってしまう。
これでは、何をどうがんばればいいのかわからない。
大人が子どもに「がんばったね」と声をかけられるのはいつなんだろう。
それは、大人が、子どもの発達にみあった適切な課題を出したときだろう。
自分は、前者の大人になってしまうことが多い。

近くの寺に、天井にとどきそうな千手観音像があります。
千本も手があると羽のように見えてきます。
迫力があり、今にも飛んでいきそうです。
この手で極楽に導いてくれると言います。
はじめてことばの教室の担当になった４月のことです。
もう一人の担当の先生がか行の発音の誤りに指導されているのを見たときは驚きました。
指で前舌を抑えただけで、か音が出てきたのです。
まるで、その担当者の手が千手観音の手のように見えたのを覚えています。
サイエンスに裏付けられた指導方法を千も持つことができれば、きっと迫力も出てくるのでしょう。
今の自分はまだまだ遠い。

小学校の生活は、朝の会、学習、休み時間、給食、掃除、終わりの会と時間が
区切られています。
決められた時間があります。
保育園や幼稚園と比べると、時間ごとにどんどん変化していきます。
ある子どもには、変化があって、楽しいかもしれません。
いっぽうで、その生活リズムに慣れるまでたいへんな子どももいます。
１年生の学習を少しずつ今からしておけば、学校生活に慣れるまで時間がかかっても、
学習の方は安心できます。
休みの日に小学校への道のりを歩いてみたり、
４５分単位で区切りをつけて過ごしてみたり、
昼ご飯の準備を手伝ってもらったり、
掃除をいっしょにしてみたり、・・・。
一日楽しく過ごせそうに思います。

学校に入学してから、学校生活のリズムを一から身につけるのでなく、
学校生活のリズムに慣れるという意味で休みの日にやってみると楽しいように思います。

ことばは約束事です。
りんごのことを「りんご」と言おうと約束しているんです。
しかし、幼児期の子どもは正しく発音できません。
誤って覚えていることもあります。
それで、「ご」だけを言って、「りんごがほしい」と表現する場合があります。
大人が、その子どものことばを理解して、対応することが大切です。
「そう、りんごが食べたいんだ。」
と答えてあげてください。
思いが伝わったことを、子どもに伝えることで、子どもはことばに関心をよせていきます。
りんごと子どもの目とお母さんの口元を直線で結んで、「りんご」と言ってあげてください。
そして少し模倣するのを待ってあげてください。
赤い皮をむいて、一緒に食べ、子どもの目を見て、笑顔で
「りんご　おいしいね。」
と声をかけてあげてください。
そんな積み重ねが、子どものことばを育てていくように思います。

３歳代の子どもは、ことばを学習しています。
しかし、話す器官の発達が未熟なんです。
話そうとするスピードでは動いてはくれません。

わかることばも増えていきます。
しかし、それを使って表現するほどの力も育っていません。
また、自分でできることが増えていきます。
それまでお母さんが「・・して」というと、その通りしていたのに、「いや」といい始めます。
それで、子どもにやらせてみると、できないことが多いです。
お母さんの手助けを必要としています。
不安定な時期なんです。

この時期の子どもは、できることが増えていくんですが、できないことがたくさんあります。

子どものエネルギーの源は、何か？
ものを目で追い、そのものに手をのばし、そのものをにぎり、そのものをもったままふりはじめます。
ものへの興味や関心が、エネルギーの一つなんでしょう。
人見知りをし、いつも近くにいてくれる大人の後追いをはじめます。
守られていることで、エネルギーを溜めていきます。
大人のまねをし、近くにいる大人が対応する。
「自分でする」と主張をし、なかなかできないけれど、自分でやりきる。
大人がそれを見て「できたね」とほめる。
学びつづける中でも、エネルギーを補充していきます。

学習能力の中でもたいせつな力に「記憶力」があります。
視覚記憶、聴覚記憶、短期記憶、長期記憶、
作業記憶、手続き記憶、宣言的記憶、エピソード記憶、意味的記憶
これらをまとめて「記憶力」と言います。
教室では、ばらばらになっていることばを整理して、子どもに提示するようにしています。
一つのまとまりを子どもに提示するようにしています。
意味的記憶を作りやすいように取り組んでいます。

ことば数が、どんどんふえていけば、それだけ表現できる物事が多くなります。
自分の頭の中の引出しが整理され、いつでも必要なときに取り出せ、時と場に応じた表現ができます。
パソコンで言えば、一つひとつの文書がフォルダに整理されている。
さらにフロッピーやCDに項目ごとに保存されている状態を言うのでしょうか。
必要なときにすぐに探し出せ、画面上に出てくるのでしょう。

言語発達が遅れているということは、一つひとつの文書はあっても、フォルダに整理されていないことを言うのでしょう。
フォルダがあってもフロッピーやCDにばらばらに保存されていて、使いたいときに見

当たらない状態を言うのでしょう。
必要なときに見つけることができない状態とおなじですね。

もうそろそろ就学時健康診断があるかと思います。
その是非も問題になっていますが、やはり必要に思います。
子どもの健康について調べ、親御さんに伝えます。
入学までに治療するいい機会のように思います。
また、一人ひとりの子どもの情報をつかんでおくことは、クラス分けや入学式からの学級指導にも役立つものです。
学級を持っていたころ、１学期の始業式の前に、健康診断票や歯科検診票、指導要録を見ながら、「この子は虫歯がない。」「一日も休んでいない。」「身長が高いんだ。」「健康に注意しないといけないな。」と言った情報を書き留めていました。
一年間の学級経営をどうするか考えはじめていました。
来年、入学する年長幼児が、健康診断をしながら、前もって小学校の校舎の中を、まわるのも慣れるためにはいいと思います。
また、面接で子どもの発音を調べ、誤りがあれば、すぐに対応できます。

生理的欲求
乳児は、食べたい、眠りたい、休みたいなど生命活動に必要な欲求を泣くことで表現します。
母親はその表現に答えて、ほほえみながら、ミルクを与え、やさしくダッコし、あやします。
母親のこうした行動により、乳児は母親への愛着を育てていきます。
安全欲求、愛情の欲求
生後６、７ヶ月もすると、母親以外の人に抱かれると、不満な顔をしたり泣き出したりします。
母親以外の人を区別し、嫌います
このことは、母親への愛着が育ってきている証拠なんです。
やがて、時間がたつと、母親の周りにいる父親、祖母、祖父も愛着の対象となります。
家族の中で、信頼の輪を広げていきます。
成就の欲求、独立の欲求
また母親への愛着が育つと、母親の行動を模倣しはじめ、見慣れた人の身振りを模倣し積極的なかかわりをもとうとします。

自分で食事をしよう、衣服をぬごう、着ようとしはじめます。
何度も、くり返し、練習します。
大人が手伝おうとすれば、「いや」といって抵抗もします。
一人でやらせると、失敗することも多いです。
しかし、一人でやりたいと練習し、一つひとつのことを獲得していきます。
承認の欲求
こうして、基本的生活習慣が身についてくると、身の回りのことを自分で処理できるようになります。
「自分にもこれだけのことができるんだ」という自信が生まれてきます。
親の指示に「いやだ」「できない」と逆らうことも多くなってきます。
自分を意識し、自己主張しているのです。
夏休みです。
一日に一回、今日は子どもがどんな欲求を表現したか、ふりかえってみて下さい。

聞き取りの弱い子どもに、一音を聞き取り、答えることをねらいに取り組みます。
場面絵カードで質問し、
はじめは場所を答えさせます。
次は「で　あそびます。」「へ　いきます。」「に　おきます。」と書いた単語カードも見せて、問います。
子どもは問いに対応した単語カードを選び、場所をつけて答えます。
そして「で」「へ」「に」と書いた文字カードを見せて、問います。
子どもは問いに対応した文字カードを選び、場所とどうするのかをつけて答えます。
念のために、「あそびます」「いきます」「おきます」と書いた単語カードを見せて、問います。
子どもは問いに対応した単語カードを選び、場所と「で」「へ」「に」をつけて答えます。

～で遊びます。このときの「で」は場所を表します。
～へ行きます。このときの「へ」は方向、方角をあらわします
～に置きます。このときの「に」は場所、方向を表します。
ややこしいのが、「へ」と「に」です。
「～に行きます。」「～へ置きます。」と会話では使っています。
きっと、使い分けていたことがあったのでしょう。
教室では、次のことを教えます。
どこで遊びますか？～で遊びます。

どこへ行きますか？～へ行きます。
どこに置きますか？～に置きます。
それぞれの問いに、対応した答え方をするよう教えます。

発達の中で表現することついてまとめてみました。
人は、自分が表現したことを受け止められると、うれしいものです。
子どもの場合も、同じようにうれしいし、この人ならといった安心感も育ちます。
この安心感が新しいことにも取り組んでいこうかな、一度やってみようかなという
気をおこさせます。
しかし、子どもの周りにいる大人がいつもいつも答えられるわけではないでしょう。
兄弟もいます。
家族もいます。
家事や仕事もあるでしょう。
そんなときは、子どもと１対１で過ごす時間を決めて、その限られた時間にしっかり、
子どもの表現に答えることです。
家族で食事をするときに、子どもがねるときに、子どもと過ごせる時間に子どもの
話しに耳を傾け、答えることです。
子どもは、欲求を満たされることで、安心感をもち、それをエネルギーとして、
子どもは自立にむかうことができます

自分は視覚認知がどちらかと言うと強いです。
聞いて分かることより、見て分かることのほうが多いです。
聞いているだけでは、理解できないことも、見ればすっきりと、理解できるときがあり
ます。
学校のペンキ塗りだってそうでした。
プリントで説明を聞くよりも、実際に塗っているのを見るほうが、塗り方を理解できま
した。
パソコンだって、自分で画面を出して、いろいろ操作してみて、覚えてきました。
解説書を読むより、自分の指で、キーを打ちながらいろいろ試しながら、たくさんのこ
とを理解しました。
最近は、店屋さんの対応までマニュアルがあるといいます。
自分もきっと、その店の人になれば、人のするのを見て仕事ができるかもしれない。
しかし理解し、自分でできるようになるまで時間がかかるから、きっとリストラにあう

かな？

音に誤りがあり、ことば数が少ない年長の幼児を指導しています。
発音への指導をしながら、ひらがなを教えていきました。
はじめは、ひらがなを行ごとに教え、読むことをねらいに指導していました。
一音ずつ読めるようになり、発音の誤りも改善してきています。
つづけて、列ごとに教え、文を読むこと、書くことをねらいに指導しています。
手本をノートの下において、ノートにうつる手本のひらがなを書く。
手本をノートの横において、ひらがなを書く。
これから、のぼっていくステップは多いです。
それでも、今日できたことを子どもに「できたね」「よくできました」「おぼえたね」と声をかけます。
この声かけが次へのやる気につながるから・・・。

物を目で追い、そのものに手をのばし、にぎり、もったままふりはじめます。
ものへの興味や関心がエネルギーの一つなんでしょう。
人見知りをし、いつも近くにいてくれる人の後追いをはじめます。
守られていることでエネルギーをためていきます。
子どもが大人のまねをし、近くにいる人がその様子を見て対応します。
自分ですると主張し、なかなかできないけれど、自分でしていきます。
周りにいる人がそれを見て「できたね」と声をかけます。
学びつづける中でも、エネルギーを補充していきます。